

高い品質の時計修理でファンを増やし、 機械化・ICT化により業界を牽引。

壊れた時計に命を吹き込み、新たな思い出を刻む手助けをする時計修理工。手先を巧みに使うその姿はまさに職人で、憧れの職業に挙げる人も多いだろう。国内の時計市場は、富裕層を中心に高級時計の売れ行きが好調となったこと、インバウンド需要が復活したこと、若い世代の顧客獲得に成功したブランドが増加したことなどを背景に、ここ数年は右肩上がりに成長している。いっぽうで、廃業に追い込まれる時計修理業者は少なくない。業界をリードする株式会社エキップメント代表取締役の大岡憲央氏は、その要因のひとつを「高齢化かつ個人事業主の割合が多いため」と指摘する。

同

社では50年以上前に作られたアンティーク時計から最新モデルまで、さまざまなブランドの時計を取り扱う。中でもハイエンドモデルの修理をメインに行い、外装からムーブメントまで、あらゆる修理のニーズに応えられる体制を整えている。白を基調としたガラス張りのオフィスでは、若い修理

工が白衣を着て作業に当たっており、さらながら研究機関のようだ。いわゆる「まちの修理屋さん」のイメージとは一線を画す。18歳で時計修理業の門を叩いた大岡氏は、9年後の1993年に独立した。90年代初頭といえば、携帯電話を持つ人もまばらな時代。日本にデジタル化の波が押し寄せる一歩手前の頃に、先を見据えて注文書などの必要書類をすべてデータ化した。会社員時代は取引先の大半が海外であり、発注をファックスで行うなど、アナログなやりとりで苦労した経験からだ。現在、エキップメントで使用しているデータベースソフトの大容量は、windows95を使って大岡氏が自ら作成したもの。「30年前の話です。今思えば、先を見る目はあったのかもしれない」と振り返る。

修

理設備にも投資を惜しまない。時計に付着した汗や皮脂を落とす超音波洗浄機、20気圧相当の防水性能をチェックできる防水試験機、機械式時計の精度を測定する自動歩度測定器などの各種機器を取り揃えるが、中でも貴重なのは、博物館の資料復元にも使われるというレーザー元素分析ヘッド。元素分析とは、レーザーにより対象物を構成する成分元素を検出し、各元素の含有量を調べることで、

つまり、時計やジュエリーに含まれている金属の種類や配合を調べることで、再現性の高い修理を可能にする。「同じ18金でも実はメーカーによって配合などが違います。お気に入りの時計やジュエリーを修理に出したら微妙に色が合わないものが返ってきて、がっかりした経験のある人は多いはず。ニーズに対して正確な技術を供給するため、経験則に頼らない作業を行っています」。

技術者のフリーリングではなく、根拠に基づいた修理を徹底し、作業の効率化と後継者の育成を推進。「時計修理業界においては、ICT化の先頭を走っている」と自負する。

後

継者の育成には、技術継承だけでなく、従業員満足度の向上にも努める必要がある。福利厚生の一環として、同社は10年間勤めた社員に対して、海外製ブランド時計を贈呈。2023年には、基本給の15%賃上げを実施した。だが、相次ぐ物価上昇を見越して、さらなる賃上げの必要性に迫られている。そのため、収益の基本となる修理受託価格の変更依頼など、取引先の理解を得るために働きかけているという。「長く続いたデフレの影響で、日本人はモノや人件費をとにかく安く抑えようとする傾向にあ

る。仕事を続けるには、技術に対する適正な評価・報酬を求めることが大事です」。

同社は、顧客が時計販売店に持ち込んだ時計をメーカー・ブランドのアフターサービス部門から預かり、委託代行運営を行っている。そのため、業務内容は時計修理に留まらず、見積もりや部品の発注・管理、価格交渉など多岐に渡る。顧客を納得させることはもちろん、販売店やブランドの言いなりにならないための確かな知識と経験が求められるのだ。

「正直なところ、技術は教われば誰でも習得できます。時計修理工にとってもっとも大切なのは技術ではなく、それを安売りしない姿勢と、意思疎通に欠かせない言語能力です。修理品

質とお客様の満足度を高め、ブランド価値の向上に繋げる仕事を徹底しています」。

産業用ロボットの発達などを理由に、時計修理工は10年ほど前には「10年以内に消える職業」の上位に挙げられていたこともある。だが、新型コロナウイルス流行期に始まったスイス高級時計ブームの影響もあり、依然として需要は高く、同社には毎週のように求人応募があるという。

「ICT化が進むほど、こういった古典的な手作業の魅力が高まるのでしよう。やはり最後まで残るのは対人コミュニケーションやインスピレーション、感性です。時計を通して、デジタル化できないものの価値を見直してもらえたら嬉しいですね」。

CHALLENGER

The Extra Edge

世の中のトレンドをリードする
話題のモノ、ヒト、コトなどを紹介

大岡憲央

OOKA NORICHIKA

株式会社エキップメント 代表取締役

1965年石川県生まれ。高校卒業後、大手百貨店に就職し、営業アシスタントとして理事運営セクションに勤務。1984年にスイス系商社の時計修理関連会社に入社し、多くの高級時計の外装修理に携わる。1993年に独立し、株式会社エキップメントを創業。1998年に法人化。